

# 市美だより

鹿児島市立美術館 | KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART

発行 鹿児島市立美術館  
〒892-0853  
鹿児島市城山町4番36号  
TEL(099)224-3400



● 展示会の会期等はすべて、新型コロナウイルス感染症の地域の感染状況により変更になる場合があります。詳しくは美術館ホームページでご確認ください。

## 無料開放日のお知らせ

毎月第3日曜日は、小・中学生は無料開放日です。所蔵作品展 + 小企画展を無料で鑑賞いただけます。**1月16日(日)**  
**2月20日(日)**、**3月20日(日)**...

## 作品介绍



### べにいろきりこくものすもん 紅色切子蜘蛛の巣文皿

鹿児島が薩摩藩と呼ばれていた19世紀半ば、美しいガラス工芸「薩摩切子」が誕生しました。その歴史は1846年、薩摩藩10代藩主・島津斉興が江戸のガラス職人を招き、薬品用の瓶などの製造に着手したことに始まります。11代藩主・斉彬は、ガラス製品を、薩摩を豊かにするための交易品として、人材と費用を惜しみなくつぎ込み、美術工芸の域まで高めた「薩摩切子」を完成させました。

薩摩切子は、透明ガラスの上に色ガラスを被せ、文様のカット(削り)を施し制作します。このカットの深さや角度によって、ガラスの透明な部分と色のついた部分が美しい色のグラデーションによる「ぼかし」を生み出します。

本作は、薩摩藩が日本ではじめて発色に成功し、当時大変評判になった深い紅色「銅赤」に、口縁(器の縁)は複雑な花型カット、側面は二重斜格子の中に英国ではストロベリー・ダイヤモンド・カットと呼ばれる魚子文、底面は蜘蛛の巣文と、様々な文様が組み合わされた華やかな作品です。

幕末のわずか20年ほどの限られた期間しか作られなかった当時の薩摩切子は、今でも人々を魅了する輝きに満ちています。

鹿児島市立美術館の公式YouTubeチャンネルを開設しました！  
スイス・パ・パシ美術館展の様子を3月まで視聴できるよ

## 冬の所蔵品展(西洋美術+郷土作家+特集コーナー)

特集：没後100年 橋口五葉④—たどり着いた境地—木版画の世界

会期：2021年12月21日(火)～2022年3月6日(日)

常設展示室では、冬の所蔵品展として、印象派から現代までの西洋美術と郷土作家を中心とした近代以降の日本美術の所蔵品をご紹介します。特集コーナーでは橋口五葉の

生誕140年/没後100年を記念して紹介する4回目になります。1914(大正3)年後期頃から、五葉はかねてより関心を持っていた浮世絵の研究に没頭します。やがて自らの下絵・監督に基づき、浮世絵の伝統技術を用いた私家版木版画を制作、浮世絵の様式美に西洋美術の感覚を取り入れ、新たな境地を拓きました。しかしながら1921(大正10)年、五葉は病により突然の死を迎えます。今回は生前に完成した珠玉の木版画を、その下絵や版木などの資料とあわせて展示します。39歳という若さで惜しくも亡くなった五葉の画業最後を飾る精華をご覧ください。



橋口五葉『髪梳ける女』1920年木版紙  
51.0×36.3cm

## ●所蔵品にふむ小企画展

### ブロンズ彫刻の世界

2021.12/21 tue → 2022.3/21 mon

### 観覧料

小中生150円、高大生200円、一般300円  
※ 観覧料は所蔵品展と共通。年間パスポートでもご覧いただけます。



彫刻には、石や木などの硬い素材をノミで彫り刻んでつくる「カーヴィング」(彫造)と、粘土や蠟などの柔らかく可塑性な素材を手やヘラで成形する「モデリング」(塑造)の技法があり、ふたつを合わせて彫塑と表現されることもあります。ブロンズ彫刻は作家が粘土で制作した原型からとった型に金属を流し込んでつくられるため塑造にあつります。粘土を付けたり削ったりする作業を繰り返しながら生み出された形のなかには、作家の試行錯誤や手のぬくもりを感じることができるといえます。

原料の「ブロンズ」(青銅)は、主成分である銅に錫を混ぜることで硬度を強くした合金です。その歴史は古く、紀元前3000年頃の

メソポタミアのシュメール文明まで遡ることができ、研磨や圧延などの加工が可能であったため斧・剣・銅鐸などが作られました。日本には

アントワーヌ・プーデル  
《弓をひくヘラクレス(習作)》1909年(寄託品)

紀元前400年頃に大陸から鉄とともにもたらされ、現在も10円玉硬貨など身近な製品に使用されています。ブロンズは錫の含有量によって赤銅色から黄金色、白銀色まで色の変化が見られ、さらに腐食によって美しい青銅色になります。ブロンズ彫刻は基本的に彩色されることはなく金属の色がそのまま生かされています。これは、あらゆる角度から鑑賞される彫刻にとって、光もまた作品の大切な構成要素となるからです。モノトーンの肌は、光によってもたれらるボリュームやモデリングを最大限に引き立てています。本展では、西洋近代彫刻の大家であるロダンやプーデルのほか、彼らにつづいて空間との関係を探究したアーキペンコやザッキン、ムーアら、そして鹿児島ゆかりの安藤照、中村晋也らの作品を一堂にご紹介します。常設展示の屋外彫刻とともにブロンズ彫刻の世界をお楽しみください。